

俺の彼女は妖狐……だけど可愛い。

恋愛物

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖狐：それは普通なら人間を騙し食らうもの。

これは、普通なら絶対にありえない、普通の人間と妖狐が恋をする物語。

目次

第1話	尻尾と耳のある彼女	1
第2話	笑顔と元気のある彼女	5
第3話	大胆不敵で積極的な彼女	10

第1話 尻尾と耳のある彼女

「れ〜い〜? 遊びに来たよお〜!」

今日もまた、外からそんな声が聞こえ、玄関の扉がドンドンと叩かれる。

声の主はとても明るく、元気そうに喋っている。

ソファから体を起こした俺こと「上代かみしろ零れい」は、コップに入っていた麦茶を一気に飲み干し、玄関へと向かう。

「やつほー、久し振りい!」

「いや、昨日会ったばかりなんですけど!?!」

扉の先、俺が見たのは、腰まで届きそうな長い黄色の髪に、黄色い目をした見た目は中学生ぐらいの女の子。

白いワンピースを着ており、露わになった肌はとても白く綺麗で、彼女が妖狐ということを忘れてしまいそうだった。

「お前、山の方は大丈夫なのかよ」

「大丈夫大丈夫! ゼーんぶ、お父さんに任せただから!」

「それでいいのか…」

腰に手を当て、その平たい胸を張らす彼女には、えっへん、と威張る仕草が良く似ている。

「……にしても、すっかり尻尾と耳、隠すの上手くなったな」

彼女は妖狐——だけれど今は尻尾と耳をうまく隠し切っているのか、妖狐が持っている特有の耳と尻尾はどこにも見当たらない。

昔はよくモフモフさせてもらったのに。

「まあね、これだけ下に降りて来る機会も増えればこうなるよ。何、まさかモフモフしたいとか？」

「させて下さい」

「やーだよ、零のへんたいーい！」

「おまつ、どっからその言葉を…！」

よく下に降りてきてるとはいえ、人間の言葉を完璧に覚えているわけではないだろう。

それなのにその単語を一体どこから…？

ま…さ…か…

「あつ、浮気とか思ってる？ やだなあ、零。 私がそんなことするわけがないじゃん」

「じゃ、じゃあどこからだよ…」

「この前、零にすまほ？ とやらを貸してもらった時にね。 零が友達と喋ってたあの——めーる とやらの文章中にその言葉があつてさく、使つて見たかったんだよね… あつ、なにになに？ 勘違いしちゃった？ ねえ、勘違いしちゃった？」

彼女は俺の方を肘で軽く小突きながら、茶化すようにそう言う。

……にしても、本当に恥ずかしい…… どうしてこうもいらないうところまで深読みしてしまうのか…穴があつたら入りたい。

「まあ零がそれだけ私のことを考えてくれてるって言うのは、嬉しいんだけどね！」

彼女はそう言つて笑顔を見せる。

「…そ、そりや考えるだろ…一応、彼氏なんだから…」

人差し指で頬を搔きながら俺は言う。

俺の言葉に驚いたのか、彼女は少しだけ目を見開いた後、俺の手をギョツと握って言った。

「ありがと！ 零こそ紛らわしいことしないでよ？ 私、結構妬いちやうから…」

「お、おう。 当たり前だよ。 ってお、お前尻尾！ 耳！」

「わ、え？ ああああああ……」

彼女は顔を赤くしながら尻尾と耳を隠そうとするが、彼女の特性として1つ。 焦っている状態では戻すことはできないのだ。

何かに照れた時、何か恥ずかしいことがあった時、彼女は本能が現れてしまうらしい。

もふもふ。

…にしても、本当に柔らかい。 永遠に触り続けたいほどだ。

「ちよ、ちよつと…ひやうつ！…もう、今戻してるんだから触らないでよー！」

「ごめんごめん、あまりにも触り心地よくて…」

「もう…」

彼女は手を頭に置き、頬を膨らませてそう言った。

「…取り敢えず家上がろうか。 見られたら困るしな。」

「うん！」

彼女は満面の笑みで頷くと、長く、少し大きい黄色の尻尾を揺らし、ピョコピョコと俺の玄関に足を入れる。

「お邪魔しまーす！ あ…零」

「何？」

「油揚げあるよね？」

「多分」

これは、普通なら絶対にありえない人間の俺と、山暮らしである妖狐との物語である。

第2話 笑顔と元気のある彼女

「あつぶらあげくあつぶらあげく♪」

家の中に入った彼女はキッチンまでつくくと、ふんふんと鼻歌を鳴らしながら冷蔵庫の扉を開けた。

冷蔵庫の中を数秒間、黄色い耳を立て、長い尻尾を揺らしながらじーつと見ていた彼女だが、数秒後、冷蔵庫の扉をゆっくりパタンと閉めると、こちらへ向かって歩いて来た。

「ない」

「えっ?」

「あぶらあげが無いよおおおお!!」

「あつ、ごめんごめん」

何に使ったつけ：ああ、そうか。

一昨日友達が遊びに来た時にうどんを作ったんだっとな。すっかりあるつもりでいたよ。

手をポンつと叩き、俺は彼女の方を見る。

彼女は赤く頬を膨らませ、こちらをジトーつと見ている。

「その…買いに行くか」

「待ってました!」

彼女は元気よくそう言うと、耳と尻尾を隠し、「早く早く!」とでも言っているかのように俺の服の裾をグイグイと引っ張る。

「子供かよ…って待って待って!!」

麦茶の入ったコップを流しに持って行こうとしたが、それを彼女は止め、玄關に俺を引っ張る。

女の子とは言え、彼女は妖狐。それなりの力は持っているのだ。

「むっ…3秒間だけだよ」

「わ、分かっているって」

ガラスのコップを急いで流しに置き、彼女の方へ戻る。

「よし、じゃあ行こうか」

「うん！」

玄関に置いてある黒い長財布をとった俺は、それを後ろのポケットにしまい、家を後にするのだった。

「うっわあく何これ何これ!!」

「あく、それはお菓子だな。ポテトチップスっていう」

「ぽてとちっぷす?」

「そうそう、ジャガイモから出来てるからそう言うんだよ」

「へえ〜」

そう、ポテトチップス。

今は確か、北海道がジャガイモ不足とかで、北海道のジャガイモを使ったポテトチップスは、あまり出品はされてないみたいだけど、地域で取れたジャガイモで作ったオリジナルのポテトチップスは販売していた。

「え…ええ!?!」

「ど、どうしたんだ?」

何か驚くものでも見つけたのか、彼女はビツクリしたように目を見開きながら、その商品棚から一步身を引いている。

どれどれ…

そう思つて見て見ると、そこには一つのカップ麺があつた。

「こ、これ、きつねうどんつて書いてある…まさか…私たち…を…」

「そんな訳無いよ!? 普通のうどんだよ、上に油揚げが乗つてる普通の」

「なーんだ、ビツクリしたあ…狐を擦り刻んでうどんにしたのかと思つた」

「怖いこと言うなよ…」

「いらつしやーい、試食はいかがですか? 当店自慢の豚肉で調理

した肉巻きですよ!」

「肉巻き…?」

「どうせなら食べるか?」

「うーん…食べる」

「何、別に変なものじゃないから」

試食コーナーにはあまり人は並んでおらず、比較的直ぐ肉巻きをもらえた。肉巻きと言つてもそこまで大きくはない。

ちやんと一口サイズで、小さい子供でも食べられるようにはしてある。

爪楊枝を使って、肉巻きを口の中に入れる俺と彼女。

「美味し〜」

彼女はそう言つて嬉しそうに笑みをこぼす。

そんな彼女を見て俺もフツと笑みをこぼし、隣に置いてある豚肉の

バックに手を伸ばし、それをカゴに入れた。

「あら、ありがとね零くん。何その子、彼女さん？　かなりお似合いじゃない」

「うっ…聡子さんにはバレましたか…」

「あら当たり前じゃない。小さい頃からあなたを見ているのよ？」

予想外だった。

試食コーナーの隣の店員が聡子さんだったなんて…

聡子さんは俺が3歳の頃から、付き合いがある面倒見のいいおばさんで、よく聡子さんの家には遊びに行ったことがあった。

「それじゃ、また遊びましょうね〜」

「子供じゃないんだから遊びませんよ!」

カゴをしつかりと掴み、俺たちはその場から早く離れると油揚げがあるコーナーへと足を進める。

「ふふ…ふふふ…」

「どうした？　そんなに油揚げが嬉しいのか？」

彼女は四角い油揚げの袋を手に取り、下を向きながら肩を震わしている。

「それもあるけど…一番は、ね？」

「？」

「私たちお似合いだっさ…ふふ…」

「あ、ああ…それか…まあ、確かに嬉しいな」

油揚げの袋をカゴに入れた彼女は、カゴを持っていない逆の手を掴んだ。

「えっ…あっ…」

親指から小指にかけて彼女は一本一本ゆつくりと、俺の指に絡ませる。

恋人繋ぎだ。

コレをするのは初めてのはず。

「嫌…だった？」

彼女は上目遣いでこちらをチラツツと見る。

流石の俺も、これには動揺をしざるを得ない

「ぜっ、全然そんなことない…ただ…」

「ただ？」

「ここがスーパーじゃなかったらな…っつて」

「ま、いいじゃんいいじゃん！」

明るく笑って見せた彼女は、とても可愛く、どこか幼げだった。

第3話 大胆不敵で積極的な彼女

買い物済ませ、スーパーを出る。

家からスーパーまでの道はそう遠くはないが、俺の住んでるところが山の麓ということもあって道中はかなり人通りが少ない。

だからこそ、俺と彼女が二人で歩いているとより目立つ。

「ふんふんふふ〜ん」

ご機嫌長に鼻を鳴らす彼女を横目に、俺は「頼むから同級生に会いませんように」とだけ願っていた。

しかしまあ嘘から出た真か、備えあれば憂いなしだったのか、俺の思念はこれでもかと言う風に粉々に砕け散る。

「……課題やったの？ はやあ。私、まだ全然手もつけてないよ」

既に前方から同級生が歩いて来ていた。片方は知らないが、もう片方はクラスが同じで結構話すような女子だ。

「ごめんリノ」

「んー？」

リノとは、彼女が麓に降りて来たときに呼ぶ用に付けた名前。照れ臭いが名付け親は俺と言うことになる。

「俺の後ろにあの人から見えないよう隠れてくれないか？」

「どうして？」

まあ、そう返されるだろうな。

「何というか、照れくさいからだよ。それに、正体がバレたら大変だろう？ だから……」

「だいじょーぶだよ！ 私、今は変化上手になったし、堂々と歩けば気にされないよ」

「いやでも同級生だから万が一があったら……」

「同級生なら尚更見せつけないと！ 零に変なむしが寄ることが一番だめだからね」

悲報、人生終了のお知らせ。

別にバレてもいいだろ。という意見に関しては否定できないが、この件はバレた後がとてもめんどくさい。何故なら、同級生の彼女

はこの数ヶ月仲良くなつて分かったが、基本的に誰にでもフレンドリーで、人一倍頭がキレるし、尚且つリノのような少し小さめの女の子に滅茶苦茶接したがる。

これに関しては語弊が生まれないように言うと、彼女には妹がいるのだが、両親離婚で離れ離れになつたらしく、中々会えていないからだそうだ。

もしリノと仲良くなればリノの正体は何なのか、恐らくではあるが彼女の頭のキレの良さから、すぐに気づかれてしまうだろう。

「でさく、ん?」

「お前だな?! 零に取り付く悪いむしは。私がいじしてやる!」
人生終了。

ちよつと悩んでいる間に、既にリノは行動していたらしい。相変わらず行動力の凄さには目を見張るものがあるが、それとこれとは別問題だ。

なんて言おう……そんな事を考えながらリノの元に駆け寄ろうとすると……

「何この子ちよーかわいい」

「わわっ!」

「そー言えばあんたそんぐらいの年の子好きだもんねえ」

彼女は軽々とリノを持ち上げ、何も聞いていないかっただかのように頬をスリスリと彼女に寄せた。

ズルい、俺でもまだそんな事した事ないのに……って違う違う。

「零ー、助けてえ〜!」

「んん〜つて、あれ、零?」

半ばあきらめた状態で俺は彼女達の元に近づいた。俺が近づいたのを確認するとリノは勢いよく彼女の腕から離れ、こちらに近づく。

「あーごめん、親戚の子でちよつと預かっててな」

「ちがっ! むぐ……!!!」

彼女の口元を押さえ、なるべく話を早く終わらせようとする。

「なるほどね、そうだ、今度私の家に連れて来てよ」

「……そ、そうする」

「うん、それじゃあ。またね！」

意外にも彼女の方から早く話を終わらせてくれた。

「あ、ああ……またな」

「まだ終わっ……ふぐう……!!!」

逃げるように俺はその場を去る。

彼女も負けじと抵抗するが、本気ではなく甘え程度なので男の力ならまだ何とかなった。

「ふうん……親戚の子……ね」

この時、この出会いがこの後もつと面倒臭いことを生むとは思ってもよらなかった。